

報告7 スウェーデン・フィンランド

北欧の統合教育

後半の旅の大きなテーマは、インテグレーション（統合教育）とインクルーシブ教育の現場を訪ね、その実態を知ることだ。

インターネット百科事典のウィキペディアは、「統合教育とは、健常者と障害者を同じ場所で教育すること。外来語では「インテグレーション」や「メインストリーミング」が相当する。「インクルージョン」と混同されやすいが、統合教育は、予め健常児と障害児を区別した上で、同じ場所で教育する。一方、インクルージョン教育は、障害の有無にかかわらず、一人一人の教育的ニーズに応じた教育を意味する」と記述する。本当だろうか？

制度改革推進会議は、6月にまとめた「第一次意見」で、「人間の多様性を尊重しつつ、精神的・身体的な能力を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加するとの目的の下、障害者が差別を受けることなく、障害のない人と共に生活し、共に学ぶ教育（インクルーシブ教育）を実現することは、互いの多様性を認め合い、尊重する土壌を形成し、障害者のみならず、障害のない人にとっても生きる力を育むことにつながる」と述べている。

では、北欧で実際どうなっているのか。

＊

ストックホルムに隣接するIT産業と住宅地・ソルナ自治体にある基礎学校グランバック・スコラン（Granbacka Skolan）を訪問する。「知的障害児と健常児の統合教育を実施している」ということで、アンネリー・ニールソンさんが担任する授業を参観した。

東洋系の顔立ちのダニエルは4年生。アフリカ系のヘーノックは6年生。そして5年生のルーカス（彼は補聴器をしていて、小さな車いすも彼のものだと



いう）。この3人を担任のアンネリーと若いアシスタント教員のアンドレアスが教えている。

学校の同じ敷地の中に「障害児学級」棟が独立して建っている。この学校にはもう一つ「障害児学級」があり、重い障害の子たち4名と教員4名で学んでいる。

「週3回は小学校の1、2年生といっしょに絵や音楽、体育をしています」「ルーカス君は生徒会役員で、生徒会に出席しています。6月の終業式には、森の中の音楽会でダニエル君と二人で歌を歌い大きな拍手をもらいました」

「担任は新入生たちにわかりやすくこの学級の子もたちのことを教えています」

「明日は”家庭科”の授業で、本校の教室を使って、自分の好きなものをつくります。家庭科は数学もスウェーデン語も使用が要求され、総合的なよい学習です」

就学のシステムについて質問してみた。

「就学前教育のところで相談があり、最終的には親が入学先の学校を判断する。それに地域に保健センターがたくさんあり、いつでも好きなだけ専門家と話し合える」「でも、自閉の子はなかなか判断が難しい。ルーカス君も2年間は普通小学校で過ごしたが、その後、この学校がよいと転校した」

自閉症児の場合には、障害があることがわかったら、ソーシャルワーカーがインタビューし、障害児ハビリテーションセンターと相談しながらプログラムを作成、両親に提示する。両親がどうしたいかという意思をはっきりと表明することが重要とされ、毎週1回会合がもたれる。そして、コーディネーターが環境が整っている保育園を手配するのだと、別の訪問先の保育園で聞いた。





静かなはずの北の海は、白い狼のような波がうねり、大揺れの中、フィンランドの首都ヘルシンキに着いた。

その足で、アウリンコラハティ基礎学校（Aurinkolahden peruskoulu）を訪問。直訳すると「お日様のあたる学校」だと通訳の川村パルムネン博子さん。

この学校は、フィンランドの中心から地下鉄で30分ほどの終点にある再開発住宅地区にある。スウェーデンやデンマークほどでないにしても移民の多いエリアだ。2002年に出来た基礎学校で就学前学校と1～9年生が学ぶ。知的障害児の特別学級があり、学童保育である午後の活動もあるという。



特別学級（7～9年生）担任のタパニ・ライタラさんは、91年から障害児教育をしているそうで、体操かレスリングの選手？という体つきだ。

ヘルシンキ市特別教育プランナーのトム・アンデルソンから「ヘルシンキ市の障害者教育について」の講義を聞く（詳細は櫻井報告）。

＊

北欧の統合教育（インテグレーション）は、まず、「健常者と障害者を同じ場所で教育すること」ではない。「場の統合」を重視しながら、それぞれの特別なニーズと障害や発達をていねいに検討され教育実践されていた。

統合教育（インテグレーション）は質的にも発展して、多様な教育の保障がとりくまれている。

（藺部英夫）

■日本のインクルーシブ教育論議

団長の品川文雄さん（全障研前委員長）が、文科省の中教審・特別支援教育の在り方に関する特別委員会（特特委員会）を欠かさず傍聴して、貴重なレポートを発信している。11月5日は、第6回目だ。

＊

宮崎英憲特特委員会委員長は膨大な「論点整理（委員長試案）」を提案。目次は、「はじめに」「総論」「就学相談・就学先決定の在り方について」「特別支援教育を推進するための人的・物的な環境整備について」「教職員の確保及び専門性向上のための方策」。でも、「特別支援教育とインクルーシブ教育は相反しない＝日本的インクルーシブ教育の表明であった。

＊

しかし、文科省は、とどのつまり、この国の障害児教育に責任を持って、抜本的に改善していく決意と確かな見通し（思想と実践力と財政）を持つ気があるのだろうか。現状の貧困な「特別支援教育」のわくの守ることに終始していないか。

全障研の荒川智委員長は、インクルーシブ教育について、

「分離か統合か」という枠組みで何か決まった形態を論じるものではなく、特定の個人・集団を排除せず学習活動への参加を平等に保障することをめざす、学校教育全体の改革のプロセスととらえるべきであ



る。「特特委員会」は、インクルーシブ教育の理念は踏まえつつも、従来からの特別支援教育の推進という方針は変わらない方向で、インクルーシブ教育のための条件整備の議論が必要だ。「特特委員会」の「日本的なインクルーシブ教育システム」では、日本ではインクルーシブ教育がすでに実施されてきたかのようで、事実認識も論理展開も混乱している。とするどく指摘している。